授業研究

公民

暮らしのなかから憲法との関わりを、具体的に見つけよう

長野県　高森町立高森中学校　教諭　篠原（しのはら） 岳成（たけのり）

1 はじめに

人口減少や少子高齢化による労働者不足や、働き方改革によりトラックやバスの運転手が不足する「2024年問題」が大きな課題となっている。高森町が位置する長野県下伊那郡（図１）でも、地域の商店の閉店や公共バスの減便など、“ひと”や“もの”の移動に課題が生じている。『社会科　中学生の公民』（以下、教科書）のp.166～167では、このような課題について「対立と合意」、「効率と公正」の見方・考え方で取り上げている。しかし本稿では、住民が抱く「移動して○○したい」という思い、例えば「バスに乗って高校に通いたい」という思いは、日本国憲法が保障する基本的人権（憲法13条の幸福追求権）につながっているのではないかと考えた。そこで教科書のp.30～31「学習の前に暮らしのなかから憲法との関わりを探してみよう」について、生活の中から見いだされる日本国憲法が保障する自由や平等といった基本的人権の具体の姿や、その権利を保障するために自治体がどのような思いで政策を実施しているのかを、生徒が実感を持って理解することを願って単元を構想した。

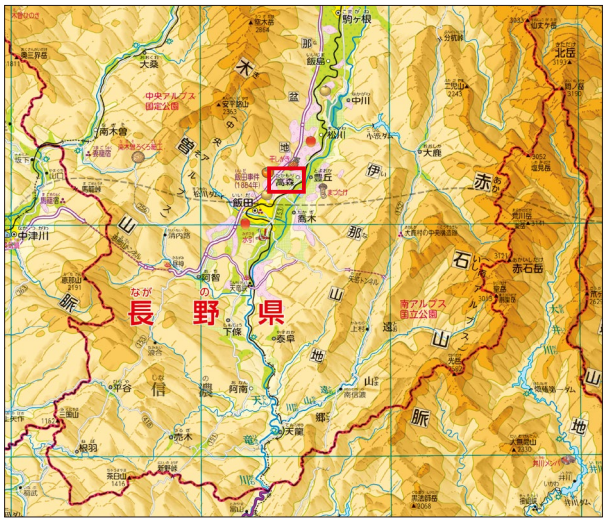

図１　『中学校社会科地図』p.122部分　13町村で構成される長野県下伊那郡と飯田市を含む地域

なお、本単元は、私が所属する信州社会科教育研究会下伊那支部で協働開発したものである。授業は下伊那郡阿南町の中学校で実践した。

2 単元設定の理由と単元展開

本単元で扱った地域素材「南部公共バス」とは、売木（うるぎ）村から、阿南町、泰阜（やすおか）村、下條村を通り、飯田市に繋がる路線バスである。かつては民間のＡ社が路線バスを運行していたが、2010年に自主路線を全て廃止したことから、５町村（上記４町村と天龍村）が集まる下伊那南部総合事務組合が、Ｂ社に運行委託するという形で誕生した。５町村で共同運営を行うという点は効率的であるが、必要経費における運賃収入は少なく、赤字分は国からの補助金、そして大半は５町村から出し合っており、路線の大半の距離を占める阿南町が多くを負担しているというのが現状である。

運賃収入で必要経費を賄えていない（＝赤字）のに、南部公共バスを運営し続ける理由とは何か。この単元を貫く問いを基本的人権の視点から追究することで、単に住民が困るからという

考え方ではなく、日本国憲法が人々の自由や権利を保障しており、その権利を具体化し、地域住民の思いや願いを叶えるための施策として自治体が運営していることを、生徒が実感を持って理解することにつながると考えた。また、仲間とこれまでの学習で得た情報や住民の願いをどのような権利が保障しているのかについて考えたことを互いに共有したい。その活動を通して、住民の自由・権利と、国や自治体の義務や公共の福祉との関わりを関連付けて、仲間の考えを生かした単元のねらいに対する考察ができると考えた。**表１**は単元展開である。

表１　単元展開

時数	学習活動
1	・地域を走る南部公共バスについて、知る。
2	・南部公共バスの運営状況から、単元を貫く問いを設定し、予想を立てる。 ・学習計画を立て、単元を貫く問いを解決するための見通しを持つ。 **単元を貫く問い** 南部公共バスは赤字なのに、どうして運営し続けているのだろう
3～6	・日本国憲法における基本的人権の尊重について、資料や教科書などを用いて学習する。
7	・実際に南部公共バスに乗る。 ・下伊那南部総合事務組合の職員に南部公共バスに関する話を伺い、質問・意見を交わす。
8	・資料やこれまでの学習を基に、単元を貫く問いについて、考察する。
9	・単元を貫く問いについて、互いの考えを共有する。
10	・これまでの学習、仲間の意見を生かして、単元を貫く問いに対する最終的なまとめをする。 ・単元の学習内容を通して、自分のこれまでの学習を振り返る。

3 授業の展開―主体的に憲法と権利の関わりを調べる―

第１時、南部公共バスについての概要を把握した後に、運営費用と運賃収入の資料を提示した。すると、多くの生徒から「大赤字じゃん」という言葉が得られた。そこで、単元を貫く問い「南部公共バスは赤字なのに、どうして運営し続けているのだろう」を設定した。単元を貫く問いに対してＡさんは、「南部公共バスの少ない利用者の中には、バスがなくなると学校に行けなかったり、買い物ができなくなったり、生活に困ってしまう人がいるから」という、高校生の通学や買い物客の存在に注目し、予想を立てた。

その後、生徒が「バスに乗れる権利が誰にあるんだろう」と声を発したことから、生徒の間で話題になった権利について取り上げ、教師から「みんなはどのような権利を持っているのか」と問いかけ、基本的人権の学習に入っていった。生徒たちと共に、今までの人権教育での内容を振り返ったり、教科書を用いて基本的人権の概要を確認したりした後に、「自分の予想を根拠付ける権利を探してみよう」と学習課題を据え、教室前に置かれた５種類のプリントから自分の予想した内容に近いプリントを選び、個人追究を開始した。**表２**はＡさんの振り返り①である。

表２　Ａさんの振り返り①

社会権の面から考えると、高校生には教育を受ける権利があるため、高校に行ったり帰ってきたりする権利もある。また、高齢者は、健康で文化的な最低限度の生活が保障されているため、買い出しや旅などに行くことができる権利もある。その他の人にも、生活していく上でしなければいけないことは自由にできる権利があるため、南部公共バスは運営している。

こうした調べ学習を進める中で、「実際に乗ってみたい」、「職員や乗客の人に話を聞いてみたい」という声が上がってきたことから、第７時には実際に乗ったり話を聞いたりする時間を設定した。この時間、Ａさんは職員の人に**表３**のような質問をした。そして、乗車体験や職員の

方との意見交換を終えた後に、表４のように振り返りをまとめた。

表３　Ａさんの質問

①どのバス停がよく乗車したり降車したりする人が多いですか?
②利用客はどれくらいの年齢の人が多いですか?
③運営をするときに工夫をしていることはありますか?
④今と昔で変わったことはありますか?（町のバス事情について）
⑤運転している方はどんな方ですか?
⑥運転手の方々は他に何か仕事をしているんですか?
⑦バスの運営で一番大変なことはなんですか?

表４　Ａさんの振り返り②

南部公共バスの主な運営理由は、車を運転することができない高校生の登下校や高齢者の通院のためである。また、送迎してもらえないときや遠くに行くときなどに便利なので、普段はあまり南部公共バスを利用しない人も利用していた。このことから、南部公共バスは赤字でも運営を続けている。

4 授業の展開―共有を通して学習内容をまとめる―

「権利の学習や乗車体験、職員・乗客の方の話から分かったことを基にして、単元を貫く問いの答えをつくろう」と生徒に呼びかけ、まとめを作成した。その時、教師からはこれまでどのような情報や人と出会ってきたのかを整理した資料を用意した。また、生徒には「まとめる前に、自分が得てきた情報を、思考ツールを使って整理しよう」と促し、生徒自身が思考ツールを選んだ。その中でＡさんは図２、３のようにまとめた。

その後、導き出した生徒それぞれの自分なりのまとめを共有し、自分のまとめをさらに深いものにする時間をとった。この中でＡさんは、仲間から「幸福追求権」という情報を得た。そして最終的なまとめとして、表５のようにまとめた。

表５　Ａさんの振り返り③

南部公共バスは、利用者の減少や運転手の確保が難しいという課題がある。しかし、全員が「幸福追求権」や「生存権」を持っているため、地方自治体として保障しなければならない。そして、持続可能なバスの運営をするために、主な利用者である高校生や高齢者の意見を取り入れつつ、アプリやGoogleマップと対応させ、より良いバスの運営を目指している。（下線部分はＡさんが共有を通して仲間から得た情報・考え）

Ａさんは、自分の予想を検証するために追究していく中で、「高校生や買い物客が困るから」という表面的な考えから、さまざまな権利を知ったり、職員や乗客と触れ合ったり、仲間と調べたことを共有したりしながら「幸福追求権」の具体の姿を多面的・多角的に追究し、考えを深めていった。また、公共バスの課題を知り、自治体の動きについて興味を抱いて調査を進める中で、地方自治体が公共バスを通して、人々の自由や権利を守る義務があるということまで

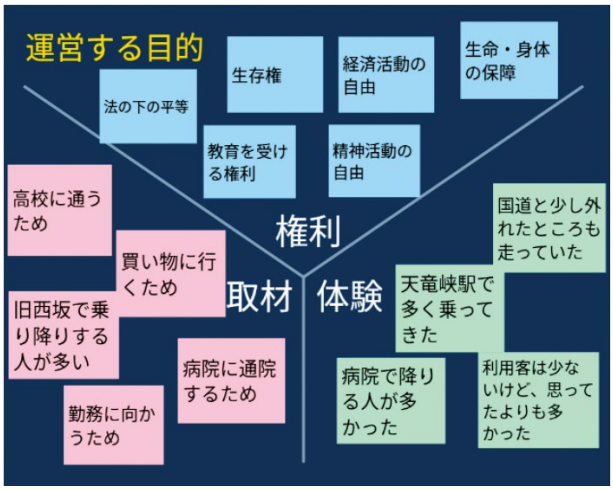

図２　Ａさんの思考ツール①

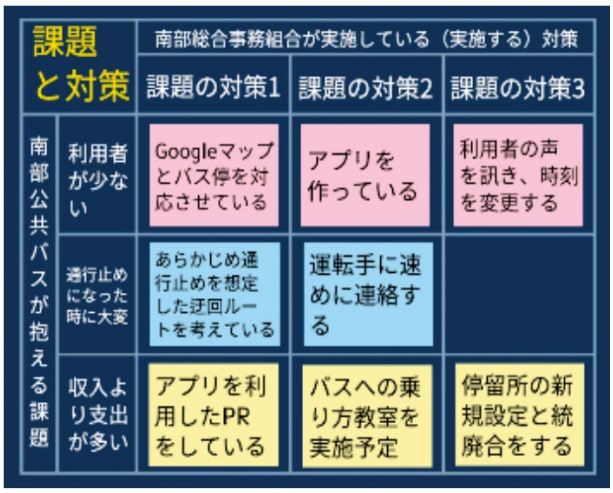

図３　Ａさんの思考ツール②

学びを深める姿が見られた。

5 評価について

本単元の目標を、図４のように生徒が授業で学んだことや振り返りを記入するスプレッドシートに提示した。単元の学習が進む中で、生徒がすぐに目標を確認しながら、授業に臨むことができるようにした。また、教師は、生徒のワークシートやスプレッドシート、ロイロノートの記述を単元の目標に照らし合わせて評価し、個々の生徒に対して支援・指導をできるようにした。

さらに、主体的に学習に取り組む態度を評価するために、図５のように、それぞれの授業を終えた時点での単元を貫く問いに対する考えや今日の授業の自己分析・自己評価をスプレッドシートに記入できるようにした。そこには、生徒が自らの学習を振り返る中で、次の授業で学びたいことを記入する姿など、自らの学びを調整する姿が見られた。

○単元の目標　（学習中・学習を終えた後の姿）

知識・技能	
思考力・判断力・表現力	南部公共バスが赤字なのに運営している理由を、南部公共バスやバス関係者の人、権利・公共交通機関等の情報を踏まえて、自分の言葉で表現できる。
主体的に学習に取り組む態度	・単元を貫く問いについて、見通しを持って追究しようとしている。 ・仲間と協力し、共有しながら積極的に単元を貫く問いへの追究に参加できている。
学習を終えた後の姿を簡潔に言うと…	①南部公共バスについて表面的に捉えるのではなく、「もの・ひと・こと」と関わり合いながら理解を深め、南部公共バスが赤字なのに運営している理由を、南部公共バスやバス関係者の人、権利・公共交通機関等の情報を踏まえて、自分の言葉で表現できる。 ②ふりかえりでは授業でわかったことだけではなく、単元を貫く問いに対する自分の考えはどのように変化したか、どのような思考プロセスを働かせたか、次回はどんなことを学びたいか等を書けるようになり、自分で自分の学びを実感・更新していくことができる。

図４　単元の目標

6 終わりに

> 権利・取材・体験の三つの面から考えると、バスが完全に運行停止してしまったら生活に困る人が出てきてしまう。住民全員の利便性を保障するため、どれだけ赤字でも続けなければいけない。

上の感想は、Ａさんが地域公共バスに関わる権利について、教科書で調べたり実際に乗車して感じたりしたことをロイロノートにまとめたものである。ここに記されているように地方自治体は、地域住民の暮らしやすさを保持し、住民の人権を守るために、公共バスの運営に税金を使うべきという考えもある。その一方で公共バスを利用せず、その恩恵を受けない住民もいる中で、公共バスの運営に多額の税金を使うことについて、公平性の観点から疑問を抱く人もいる。このような視点を、教科書p.166～167「アクティビティに挑戦 赤字バス路線に税金を使うべきか？」の議論を生徒が行う際に与えるならば、「対立から合意」に向けて、「効率と公正」の見方・考え方を働かせて課題点と解決策をより具体的に考えることができるようになるのではないかと考える。

社会科　ふりかえりシート

単元　公民　【地域を知ってみよう！　南部公共バス】

単元を貫く問い　南部公共バスは赤字なのに、どうして運営し続けているの？

現時点での予想　南部公共バスの少ない利用者の中には、バスがなくなってしまうと学校に行けなかったり、買い物ができなくなったりしてしまい、生活に困ってしまう人がいるから。

	日付	単元を貫く問いに対する今日の時点での考え（今日のわかったこと・学んだことなどを踏まえて）	今日の授業の自己分析（仲間と考えたこと、その時間の思考の流れ、次回学びたいことなど）	自己評価
１時間目	9月25日(水)		①阿南町一飯田市のあたりを走っていて、車の運転ができない高校生や高齢者に便利な交通機関。 ②意外とたくさん停留所があって、一日に出ている本数も少なくないこと。	
２時間目	9月26日(木)	南部公共バスの利用者は、車を持っていなかったり運転できなかったりする人が多いと思う。それ故、高校生や高齢者に需要があり、バスがなくなってしまうと生活に困ってしまう人が出てしまうから。	南部公共バスは赤字なのにどうしてあるのかを調べるために、どんなことをどんな人に聞くのか・調べるのかを考えることができた。次回は、実際に調べて運営し続ける理由を知りたい。	A
３時間目	9月30日(月)	社会権の面から考えると、高校生には教育を受ける権利があるため、高校に行ったり帰ってきたりする権利もある。また、高齢者は、健康で文化的な最低限度の生活が保障されているため、買い出しや旅などに行くことができる権利もある。その他の人にも、生活していく上でしなければいけないことは自由にできる権利があるため、南部公共バスは運営している。	5町村に住んでいる人の社会権を保障するために南部公共バスは必要なんだと思った。そのほかにも自由権や平等権も南部公共バスを運営する上で必要だとも思った。次回は自由権や平等権の詳しい内容を学びたい。	A
４時間目	10月1日(火)	平等権の面から考えると、誰でも「○○したいけどできない」ということがないように運営していると思った。高校に行きたいけど行けない人と、自由に行くことができる人の間では不平等だと思った。	平等権を学んでいて、誰もが平等に過ごすことができる権利はあるけど、誰もが平等に暮らすことは不可能だと思った。なぜなら、生まれてきた家の家柄・身分や環境などに違いがあって、みんながみんな同じ土俵に立つことは難しいと思ったから。	A

図５　社会科ふりかえりシート